

## ■ 2021年5月号

### ● 特集 プロログ

p.20 右段 ↓ 1行目～12行目 文章差し替え：「PICマイコンの生い立ちは1970年代中ごろGeneral Instruments社が開発した「PIC1650」が起源とされています。これに続いて開発されたPIC16C5xシリーズはワンタイムPROM型か高価な紫外線消去型なので、一度プログラムを書き込んだら、2度目はないか、消去にしばらく待たなければならないというものでした。したがって、机上デバッグは相当慎重にしなければなりませんでした。

この後1994年に日本に最初に紹介されたのが、「PIC16C84」でした。電氣的に消去が可能だったため多く使われ始め、続いて1997年には書き換え回数が格段に増えたフラッシュ・メモリの「PIC16F84」が開発され、いずれも個人でも購入ができたことから一挙にユーザーが増えました。」

## ■ 2021年6月号

### ● 特集第5章

p.86 左段 ↑ 13行目：DFU内部のデータ → DFB内部のデータ

### ● 重点企画第1章

p.97 右段 ↓ 3行目：出力電圧が小さく過度の依存性が大きく → 出力電圧が小さく、さらに温度の依存性、固体差も大きいので

### ● 一般記事 3桁表示ミリオーム計の設計・製作

p.128 図7(a)：電流源記号の近くに“10 mA”を追加

p.128 図7(b)：電流源記号の近くに“10 mA”を追加、抵抗 $R_1$  1 mΩに対してコメント追加“10 mAの電流が流れる”

p.129 図8(b)の $U_2$  74HC595の11番ピン：SREG\_DCR → SREG\_DCK

p.129 図8(b)の7セグメントLED：端子gの下に“dp”を追加

p.130 図8(c)の $C_8$  3.3 μF：回路記号が電解コンデンサになっているが、極性がないセラミック・コンデンサ

p.130 図8(c)の $V_1$ ：OM-3x1 → UM-3x1

p.130 図8(d)の $D_1$ ,  $D_7$ ：HSM1245 → HSM124S

p.130 図8(d)の $R_{17} \sim R_{19}$ ： $R_{17}$  100 kF →  $R_{17}$  10 kF,  $R_{18}$  100 kF →  $R_{18}$  1 kF,  $R_{19}$  100 kF →  $R_{19}$  500 F

p.130 図8(d)の $U_4$ のコメント：CMOS 4052BE相当品 HC4052Bは±5 V対応品ならOK → CMOS 4052B相当品 HC4052は±5 V対応品ならOK

p.138 図19の $D_1$ ：HSM1245 → HSM124S ※図8の訂正版をトランジスタ技術のwebページ[ダウンロード] → [2021年] → [TR2106M.zip] からダウンロードできます

### ● 連載 新人技術者のためのアナログ回路設計スタディ

p.176 左段 ↑ 16行目：開発されたが、図(a)に示す → 開発されたが、同図(a)に示す

p.178 右段 ↓ 2行目：極端な例では図4の → 極端な例では図5の

p.179 右段 ↑ 15行目：余った分は図6で → 余った分は図7で

### ● 連載 FFTアナライザの科学計測応用

p.191 右段 ↓ 7行目の式：

$$\frac{\sin\left\{2\pi\left(\frac{2\pi n}{N}-1\right)\right\}}{2\pi\left(\frac{2\pi n}{N}-1\right)} \\ \downarrow \\ \frac{\sin\left\{2\pi\left(\frac{2n}{N}-1\right)\right\}}{2\pi\left(\frac{2n}{N}-1\right)}$$

p.195 図11 サブ・キャプション ↑ 2行目：回転傾斜で、解析結果としてわかりにくい → 回転傾斜は不揃い

### ● 連載 がんばれ、新人君!!

p.197 左段 ↑ 16行目：しきい値 → 閾値 (以下同)